博士論文（要約）

論文題目　　グレゴリオス・パラマスの身体観

—東方キリスト教的人間観の研究—

氏　　名　　袴田　玲

グレゴリオス・パラマスの身体観
―東方キリスト教的人間観の研究―

平成 27 年 3 月提出

東京大学大学院人文社会系研究科（宗教）博士学位申請論文

袴田　玲

聖大齋ノ第二主日

斯ノ日我等ノ聖神父フェサロニカノ奇跡者大主教グリゴリイパラマノ記憶ニ左ノ奉事ヲ歌フ。至聖ナル總主教フィロフェイノ作ル所。

我等ハ何ノ讃美ノ歌ヲ以テカ成聖長グリゴリイヲ歌頌セン、彼ハ神學ノ角、恩寵ノ火ヲ噴ク口、聖神ノ尊キ器、教會ノ動カザル柱、全地ノ大ナル飾、睿智ノ河、光ノ灯臺、造物ヲ照ス光明ナル星ナリ。

我等ハ何ノ歌頌ノ花ヲ以テカ偉大ニシテ奇異ナル成聖長グリゴリイニ冠ラセン、彼ハ敬虔ヲ護リ、不虔ヲ防グ爲ニ戰ヒタル軍士、正教ノ熱心ナル守護者、大ナル師傅及ビ教導師、聖神ノ至リテ美キ音ノ琴、金光ノ舌、信者ノ爲ニ醫治ノ流レ湧カス泉ナリ。

我等地上ノ者ハ何ノ口ヲ以テカ成聖長ヲ讃メ揚ゲン、彼ハ教會ノ教師、神聖ナル光ノ傳道師、聖三者ノ奥密者、修道士等ノ大ナル飾、行ト明悟トヲ以テ輝キシ者、フェサロニカノ譽、天上ノ至リテ奇異ナル潤膏者聖ディミトリイノ同郷者ナリ。

克肖ニシテ三福ナル至聖神父、善キ牧者、牧師長ハリストスノ門徒、生命ヲ羊ノ爲ニ捐テシ我ガ捧神ナル父、グリゴリイヨ、自ラ今モ爾ノ祈禱ヲ以テ我等ニ大ナル憐ヲ賜ハンコトヲ求メ給へ。

教導ニ於テ勇マシキ爾ノ舌ハ心ノ耳ニ響キテ、怠ル者ノ靈ヲ起シ、爾ノ福音ノ言ニ因リテ地ヨリ神ニ登ス梯ハ得ラル。求ム、フェサリヤノ奇異ナルグリゴリイヨ、爾ヲ尊ム者ヲ神聖ナル光ニテ照サンコトヲ絶エズハリストスニ祈リ給へ。

日本正教會翻譯『三歌齋經』
明治四十四年七月印行

凡例

本論で取り上げるグレゴリオス・パラマスからの引用は、すべてギリシア語原典から筆者が訳出したものである。翻訳に際しては、『フィロカリア』に収録されているパラマスの諸作品を含めすべて Π. Κ. Χρήστου による現代ギリシア語対訳校訂版 *Γρηγορίου τοῦ Παλαμᾶ· Ἅπαντα τὰ Ἔργα*, t. 1-11, Θεσσαλονίκη, 1981-1987 を用いたが、パラマスの主著『聖なるヘシュカストのための弁護（*Λόγοι ὑπὲρ τῶν ἱερῶς ἡσυκαζόντων*）』に限り、J. Meyendorff によるフランス語対訳付校訂版 *Défense des saints hésychastes,* t.1-2, Louvain, 1959 を用いた（節分けもそれぞれの校訂者のものに従った）。

なお、『聖なるヘシュカストのための弁護』はそれぞれ異なる時期に順次著された 3 部から成り、それぞれの部がさらに 3 章構成をとっている。この 3×3 の構成ゆえに、同書は *Triades* と呼ばれる習わしとなっており、本論もこれを踏襲している。また、全部で 9 つのこれらの章は、それぞれ節分けされている。したがって、例えば *Triades* I-3-16 とあれば、それは『聖なるヘシュカストのための弁護』第 1 部第 3 章第 16 節のことを指す。以下、本論でパラマスのテクストが引用される際には、すべてこの表記に則っている。

テクストの翻訳に際しては、上記校訂版に付された現代ギリシア語訳、フランス語訳に加え、以下に挙げる諸現代語訳を参考にした。

（全集）*Che cos'è l'ortodossia：capitoli, scritti ascetici, lettere, omelir*, E. PARRELLA, C. COSTALONGA, L. LAMASTRA, E. GRESELIN, S. GEORGOPOULOS, Milano, 2006-2009.

（*Triades*）*Difesa dei santi escasti* I. 3. 4-52 (La spiritualità dell' oriente cristiano, L'Esicasmo), M. PAPAROZZI, Roma, 1981 ; *The Triades* (The Classics of Western Spirituality), trans. N. GENDLE, New York, 1983 ; *Difesa dei santi esicasti*, introduzione di R. D'ANTIGA, Padova, 1989 ; *Триады*, Л. С. Чибисенков, И. В. Жарко, Л. Я. Далимова, Москва, 1995.

（『講話集』）*Douze homélies pour les fêtes*, trad. J. CLER, Paris, 1987 ; *Омилии*, tom.1, 2, Москва, 2008 ; *The Homilies*, C. VENIAMIN, Waymart, 2009.

（『フィロカリア』に収録されたパラマスの著作〔パラマスの諸作品が収録された D′巻および最終話「グレゴリオス・パラマスの生涯から」が収録された E′巻の翻訳〕）*La filocalia*, vol. 4, trad. M. B. ARTIOLI , M. F. T. LOVATO, Gribaudi, 1987. ; *La Philocalie des pères neptiques*, trad. O. CLÉMENT, O., J. TOURAILLE, Desclée de Brouwer, 1995 ; *The Philokalia,* the Complete Text, G. E. H. PALMER, P. SHEPPERD and K. WARE, Faber and Faber, vol. 4 ,1995 ; *Добротолюбне*, tom. IV, V, Москва, 2007 ; *Filocalia*, vol. 7, 8, trad. D. STĂNILOAE, Bucureşti, 2013.

本邦では、グレゴリオス・パラマスの作品はこれまで大森正樹によって翻訳が進められてきた。「聖なるヘシュカスト（静寂主義者）のための弁護（第 I 部第 3 章）」、大森正樹訳、『中世思想修正原典集成 3　後期ギリシア教父、ビザンティン思想』、平凡社、1994

年 ;「第 34 講話」、「第 35 講話」、大森正樹訳、『中世思想原典集成 3　後期ギリシア教父、ビンティン思想』、平凡社、1994 年 ;『フィロカリア』VII 巻（パラマスの諸作品を収録）、大森正樹訳、新世社、2009 年 ;『フィロカリア』IX 巻（最終話「グレゴリオス・パラマスの生涯から」を収録）、大森正樹、橋村直樹訳、新世社、2013 年。本論で扱うパラマスのテクストの内、すでに大森による邦訳が存在するものに関しては、それらを大いに参考にしつつ本論での用語等に併せて部分的に変更が加えられている。

『聖書』からの引用は *Septuaginta,* ed. A. RAHLFS et R. HANHART, Deutsche Bibelgesellschaft, 2006 および *Novum Testamentum Graece*, ed. E. & E. NESTLE, B. & K. ALAND et al., Deutsche Bibelgesellschaft, 2005 に依り、邦訳としては『聖書 引照つき新共同訳』日本聖書協会、2012 年（一部、日本正教会翻訳『我主イイススハリストスの新約』正教本会版、1985 年）を用いた。聖書中の各書名の略語もこちらに倣っている。

引用文中、中略は「…中略…」、後略は「…後略」と表記した。また、引用文中の（）内は引用者による言い換え、〔〕は引用者による補いを表す。

グレゴリオス・パラマスという人物は正教会（Orthodox Church）の伝統に連なる思想家である。その意味では、本論で用いる聖書的、神学的、典礼的用語の訳語は日本ハリストス正教会における言葉遣いを踏襲すべきと思われるが、本邦における学術的著作および論文でこれまで主に使用されてきた訳語との統一の観点から、ほとんどの場合は日本ハリストス正教会における言葉遣いとは異なる訳語をあてることとなった。これはひとえに読者の混乱を避けるための選択であることあらかじめ申し上げるとともに、これまで日本ハリストス正教会がわが国において積み重ねられてきた伝統に心からの敬意を表したい。

目次

序
１. 問題の所在……1
２. グレゴリオス・パラマスの生涯とその時代背景……9
＜幼年期＞＜アトスでの修業時代＞＜テサロニケへ＞＜ベロイアにて＞
＜アトスへの帰還＞＜バルラアムとの最初のやり取り＞＜ヘシュカスム論争＞
＜バルラアム後のヘシュカスム論争とテサロニケ大主教としての晩年＞
３. 本論の構成……23

第１部　山の身体
第１章　ヘシュカスムの起源と歴史的展開……25
第１節　基本的な言葉と概念の説明……25
第１節第１項　ヘシュカスム(ヘシュカスト)……25
第１節第２項　神化概念……26
第１節第３項　知性(ヌース)概念……27
第１節第４項　心(臓)概念……30
第２節　「イエスの御名の祈り」と祈りにおける身体技法の発展……31
第２節第１項　聖書と砂漠の師父の時代……32
第２節第２項　シナイの時代……33
第２節第２項 a. バルサヌフィオス(c.540没)と預言者ヨアンネス……33
第２節第２項 b. ヨアンネス・クリマコス(649没)……34
第２節第２項 c. シナイのヘシュキオス……34
第２節第３項　シナイとアトスの接合肢――新神学者シメオンと祈りの「手引書」……35
第２章　グレゴリオス・パラマスの修行論……38
第１節　祈りの不断性……38
第１節第１項　バルラアムの見解――「祈りの状態」……39
第１節第２項　パラマスの見解――文字通り「不断に祈る」……40
第１節第３項　「不断に祈る」目的……41
第２節　身体技法を可能にするもの――パラマスの基本的な身体観……45
第２節第１項　バルラアムの見解――知性(ヌース)を身体の外へ……45
第２節第２項　パラマスの反論――身体は悪しきものではない……47
第２節第３項　「場」としての身体……50
第３節　身体技法の具体的な意味づけ……51
第３節第１項　姿勢……51

第３節第２項　心(臓)の役割……55
第３節第３項　知性(ヌース)の運動と呼吸法……59
第３節第４項　感覚の協働……67
第３節第４項 a. バルラアムの見解――祈りの障害物としての感覚……67
第３節第４項 b. パラマスの反論――祈りにおける触覚の役割……69
第３節第４項 c. 悔恨をもたらす苦痛……72
第３節第４項 d. 涙の効用……74
第４節　合一体験における身体と感覚……76
第４節第１項 「神を光として見る」ことをめぐって――擬ディオニュシオス解釈..76
第４節第１項 a. バルラアムの見解――神の認識不可能性と否定神学……77
第４節第１項 b. パラマスの反論――神学と観想の違い……81
第４節第１項 c. 勝義の光……83
第４節第１項 d.「神として、神を通じて、神を見る」……86
第４節第１項e. 霊的感覚……88
第４節第２項　身体の内に働く神……88
第４節第２項 a. バルラアムの見解――脱身体的合一……89
第４節第２項 b. パラマスの反論――在身体的合一……91
第１部のまとめにかえて――近代西欧的分離の精神と東西キリスト教会における身体….95
＜近代西欧的分離の精神＞
＜東西キリスト教会における身体＞
＜本論後半の議論に向けて＞

間奏　エウカリスティアの実践――第１部から第２部への懸け橋として

第１章　ヘシュカストとエウカリスティア……105
第１節　さまざまなエウカリスティアのかたち……108
第１節第１項　私的な聖体拝領……108
第１節第２項　半隠修制……110
第２節　パラマスの選択……111
本章のまとめ……113
第２章　聖体拝領の頻度をめぐる問題……115
第２章第１節　聖体拝領の頻度の歴史的変遷……115
第２章第２節　パラマスとその他のヘシュカストによる頻繁な聖体拝領の勧め……122
第２節第１項　頻繁な聖体拝領の主唱者たち……122
第２節第２項　パラマスは頻繁な聖体拝領を勧めたか……123
本章のまとめとアンティドロンについて……127

第２部　街の身体

第１章　テサロニケ大主教としてのパラマス……130
第１節　当時のテサロニケの状況……130
第２節　パラマスの大主教着座をめぐって……135
第３節　パラマスの『講話集』について……138
第２章　グレゴリオス・パラマスのエウカリスティア論……145
第１節　東方キリスト教における「秘跡論」？……146
第２節　パラマスにとっての秘跡――洗礼とエウカリスティア……148
第３節　身体を介して伝えられる救いの力――パラマスのエウカリスティア論の救済論的側面（『第60講話』の分析より）……149
第３節第１項　キリストの洗礼と最後の晩餐――二つの秘跡の原型……149
第３節第２項　魂と洗礼、身体とエウカリスティア……150
第３節第３項　キリストの身体……153
第３節第４項　被造物における人間の卓越性とその根拠としての三一性……155
第３節第５項　神と人間との合一における二つのありかた――受肉における人間本性との合一と秘跡における人間個人との合一……159
第４節　神化への道としてのエウカリスティア――パラマスのエウカリスティア論の神秘的側面（『第56講話』の分析より）……165
第４節第１項　拝領のための準備――魂の浄化としての悔い改め……165
第４節第２項　キリストの身体に満ち溢れる神化の力――垂直的合一と水平的合一……167
本章のまとめ……171

むすびとひらき……175

補論１．「身体が万人に披く神秘―『エヒイェの受肉的実践・身体化』としてのヘシュカスム」……177

補論２．「『フィロカリア』編纂の背景と神化概念の拡がり」……195

参考文献一覧……215

袴 田 玲、『グレゴリオス・パラマスの身体観――東方キリスト教的人間観の研究』、知泉書館、2023 年刊行予定。

参考文献一覧

＜パラマスの著作（全集および本論で扱った *Triades* と『講話集』に関連して）＞
（全集）
Ἅπαντα τὰ Ἔργα, τ. 1-11, ἐπιμ., Π. Κ. Χρήστου, Θεσσαλονίκη, 1981-1987.
Che cos'è l'ortodossia：capitoli, scritti ascetici, lettere, omelir, E. PARRELLA, C. COSTALONGA, L. LAMASTRA, E. GRESELIN, S. GEORGOPOULOS, Milano, 2006-2009.
Patrologia cursus completus Series graeca (PG), ed. J.-P. MIGNE, Paris, 1865, t. 150, 151.
Συγγράμματα, τ. 1-5, ἐπιμ., Π. Κ. Χρήστου, Θεσσαλονίκη, 1962 (1988²) -.
（*Triades*）
Défense des saints hésychastes, éd. J. MEYENDORFF, introduction texte critique, traduction et notes, t.1-2, Louvain, 1959.
Difesa dei santi esicasti, introduzione di R. D'ANTIGA, Padova, 1989.
Difesa dei santi escasti I. 3. 4-52 (La spiritualità dell' oriente cristiano, L'Esicasmo), M. PAPAROZZI, Roma, 1981.
The Triades (The Classics of Western Spirituality), trans. N. GENDLE, New York, 1983.
「聖なるヘシュカスト（静寂主義者）のための弁護（第 I 部第 3 章）」、大森正樹訳、『中世思想修正原典集成 3　後期ギリシア教父、ビザンティン思想』、平凡社、1994 年。
Триады, Л. С. Чибисенков, И. В. Жарко, Л. Я. Далимова, Москва, 1995.
（『講話集』）
Douze homélies pour les fêtes, trad. J. CLER, Paris, 1987.
Ὁμιλίαι ΚΒ' (=Hom. 42-63), ἐκ δ. Σ. Οικονόμου, Αθήναι, 1861.
Омилии, tom.1, 2, Москва, 2008.
The Homilies, C. VENIAMIN, Waymart, 2009.
「第 34 講話」、「第 35 講話」、大森正樹訳、『中世思想原典集成 3　後期ギリシア教父、ビンティン思想』、平凡社、1994 年。

＜『フィロカリア』に収録されたパラマスの著作（翻訳、抄訳等はパラマスの諸作品が収録された D′巻および最終話「グレゴリオス・パラマスの生涯から」が収録された E′巻に関連して）＞
Φιλοκαλία τῶν ἱερῶν νηπτικῶν, τ. D′, E′, Αθήναι, 1991, 1992.
Добротолюбие, tom. IV, V, Москва, 2007.
Filocalia, vol. 7, 8, trad. D. STĂNILOAE, Bucureşti, 2013.
La filocalia, vol. 4, trad. M. B. ARTIOLI , M. F. T. LOVATO, Gribaudi, 1987.
La Philocalie des pères neptiques, trad. O. CLÉMENT, O., J. TOURAILLE, Desclée de

Brouwer, 1995.
The Philokalia, the Complete Text, G. E. H. PALMER, P. SHEPPERD and K. WARE, Faber and Faber, vol. 4 ,1995.
『フィロカリア』VII 巻、大森正樹訳、新世社、2009 年。
『フィロカリア』IX 巻、大森正樹、橋村直樹訳、新世社、2013 年。
История одного города, М. Е. С. Щедрин, Санкт-Петербург, 1869-70（『ある都市の歴史・堕落の子』（シチェドリン選集第 6 巻）、西尾章二、西本明昭治訳、未来社、1986 年）.
Откровенные рассказы странника духовному своему отцу, Москва, 2009 (『無名の順礼者 ： あるロシア人順礼者の手記』、P. A. ローテル、斎田靖子訳、エンデルレ書店、1995 年英訳からの重訳)
Petite Philocalie de la prière du coeur, trad. J. GOUILLARD, Édition du Seuil, 1979.
Writings from the Philokalia on Prayer of the Heart, trad. E. KADLOUBOVSKY and G.E.H. PALMER, Faber and Faber, 1951(『修徳の実践―心の祈り（イエスの祈り）に関する著述―』、斎田靖子訳、エンデルレ書店、1995 年).

＜その他、本論で扱った一次文献＞

・ARISTOTELES（アリストテレス）
De Anima, ed. W. D. ROSS, Oxford, 1956（『霊魂論』（アリストテレス全集 6）山本光雄訳、岩波書店、1968 年）.
・BARLAAMUS DE SEMINARIA（バルラアム・カラブロ）
Epistola ad Demetrium, PG 151, 1865.
Epistole Greche, studio introduttivo e testi a cura di Giusep.e Schirò, Palermo, 1954.
Le epistole greche, ed. A. Fyrigos, in *Dalla controversia palamitica alla polemica esicastica (con un'edizione critica delle Epistole greche di Barlaam)*, Roma, 2005.
・GREORIUS NYSSENUS（ニュッサのグレゴリオス）
Apologia in hexaemeron, *Patrologia cursus completus Series graeca* (PG), ed. J.-P. MIGNE, Paris, 1863, t. 44, 61-124.
De Vita Moysis, *Gregorii Nysseni Opera Omnia*, ed. W. JAEGER, H. LANGERBECK, vol. VII, pars I, ed. H. MUSURILLO, Leiden, 1944（「モーセの生涯」谷隆一郎訳、『キリスト教神秘主義著作集 1』、教文館、1992 年）.
In Canticum Canticorum, *Gregorii Nysseni Opera*, ed. W. JAEGER, vol. VI, ed. H. LANGERBECK, Leiden, 1960 (1986)（『雅歌講話』大森正樹、谷隆一郎、秋山学、篠崎榮訳、新世社、1991 年）.
In diem luminum, *Gregorii Nysseni Opera , Sermones*, ed. G. HEIL et al., vol. IX, pars I, Leiden, 1967.

Oratio Catechetica, Gregorii Nysseni Opera Dogmativa Minora, ed. W. JAEGER, H. LANGERBECK, H. DÖRRIE, vol. III, pars IV, ed. E. MÜHLENBERG, Leiden-New York-Köln, 1996（「教理大講話」篠﨑榮訳、『盛期ギリシア教父 中世思想原典集成２』、平凡社、1992 年）.

・GREGORIUS NAZIANZENUS（ナジアンゾスのグレゴリオス）

Orationes, XIV, *Patrologia cursus completus Series graeca* (PG), ed. J.-P. MIGNE, Paris, 1857, t. 35, 393-1252.

・JOANNES CHRYSOSTOMUS（ヨアンネス・クリュソストモス）

Expositiones in Psalmos, *Patrologia cursus completus Series graeca* (PG), ed. J.-P. MIGNE, Paris, 1862, t. 55, 35-527.

・JOANNES CLIMACUS（ヨアンネス・クリマコス）

Scala Paradisi, *Patrologia cursus completus Series graeca* (PG), ed. J.-P. MIGNE, Paris, 1864, t. 88, 631-1164（「楽園の梯子（第 27 講話）」手塚奈々子訳、『後期ギリシア教父・ビザンティン思想 中世思想原典集成 3』、平凡社、1994 年）.

・JOANNES DAMASCENUS（ダマスコのヨアンネス）

Dialectica 29, *Patrologia cursus completus Series graeca* (PG), ed. J.-P. MIGNE, Paris, 1864, t. 94, 518-676（「知識の泉（第 3 部 1-81 章）」小高毅訳、『後期ギリシア教父・ビザンティン思想 中世思想原典集成 3』、平凡社、1994 年）.

・NICOLAUS CABASILA（ニコラオス・カバシラス）

La vie en Christ (Sources chrétiennes n. 355, 361), introduction, texte critique, traduction, et annotation par M.-H. CONGOURDEAU, Paris, 1989-1990.

Letters, ed. M.-H. CONGOURDEAU, in *Correspondance de Nicolas Cabasilas*, Paris, 2010.

・PHILOTHEUS KOKKINUS（フィロテオス・コッキノス）

Λόγος ἐγκωμιαστικὸς εἰς τὸν ἐν ἅγιοις πατέρα ἡμῶν Γρηγόριον ἀρχιεπίσκοπον Θεσσαλονίκης τὸν Παλαμὰν ἐν ᾧ καὶ τινων ἀπὸ μέρους ἱστορία θαυμάτων αὐτοῦ, PG 151, 551-678.

・PLATON（プラトン）

Parmenides, in *Opera*, tom. II, ed. I. BURNET, Oxford, 1901（『パルメニデス』（プラトン全集 4）田中美知太郎訳、岩波書店、1975 年）.

Respublica, ed. S. R. SLINGS, Oxford, 2003（『国家』（プラトン全集 11）藤沢令夫訳、岩波書店、1976 年）.

・PLOTINUS（プロティノス）

Ennéades, vol.1-7, ed. É. BRÉHIER, Paris, 1924-1938.

Plotini Opera, vol.1-3, ed. P. HENRY and R. SCHWYZER, Oxford, 1964-1982（『プロティノス全集』第 1-5 巻、田中美知太郎、水地宗明、田之頭安彦訳、中央公論社、

1986-1988 年）.

・PSEUDO-DIONYSIUS AREOPAGITA（擬ディオニュシオス・アレオパギテース）

De divinis nominibus, in *Corpus Dionysiacum* I, hrgb. von B. L. Suchla, Berlin-New York, 1990（「神名論」熊田陽一郎訳、『キリスト教神秘主義著作集 1』、教文館、1992 年）.

De Mystica Theologia, in *Corpus Dionysiacum* II, hrgb. von G. Heil & A. M. Ritter, Berlin / New York, 1991（「神秘神学」熊田陽一郎訳、『キリスト教神秘主義著作集 1』、教文館、1992 年）.

Epistula 5, in *Corpus Dionysiacum* II, hrgb. von G. Heil & A. M. Ritter, Berlin / New York, 1991（「第一書簡」「第五書簡」月川和雄訳、『後期ギリシア教父・ビザンティン思想 中世思想原典集成 3』、平凡社、1994 年）.

・PSEUDO-MACARIUS（擬マカリオス）

Homiliae, *Patrologia cursus completus Series graeca* (PG), ed. J.-P. MIGNE, Paris, 1860, t. 34, 449-822.

＜聖書、辞書文法書類＞

・聖書

Septuaginta, ed. A. RAHLFS et R. HANHART, Deutsche Bibelgesellschaft, 2006.

Novum Testamentum Graece, ed. E. & E. NESTLE, B. & K. ALAND et al., Deutsche Bibelgesellschaft, 2005.

新共同訳『聖書』日本聖書協会、2004 年。

日本正教会翻訳『我主イイススハリストスの新約』正教本会版、1985 年。

秦剛平訳『七十人訳ギリシア語聖書』I-V、河出書房新社、2002-2003 年。

・辞書文法書類

A Greek-English Lexicon, H. G. LIDDELL and R. SCOTT, compiled by H. GEORGE with a supplement, Oxford, 1968[22]（1843[1]）.

A Patristic Greek Lexicon, G. W. H. LAMPE, Oxford, 1989[9] (1961[1]).

Dictionnaire de Spiritualité. Ascétique, mystique, doctorine et histoire, dir. V. MARCEL et al., tom. 1-17, Paris, 1937-1995.

EUCHARISTIA Encyclopédie de l'Eucharistie, dir. M. BROUARD, Paris, 2002.

Greek Grammar, ed. H. W. SMYTH, Harvard University Press, 1984.

The Catholic Encyclopedia, C. HERBERMANN, E. PACE, C. PALLEN, T. SHANAN, J. WYNNE et al., vol.1-16, New York, 1913.

The Greek Particles, J. D. DENNISTON, London, 1996.

The Oxford dictionary of Byzantium, ed. A. P. KAZHDAN et al., vol. 1-3, Oxford University Press, 1991.

『岩波キリスト教辞典』、大貫隆、名取四郎、宮本久雄他編、岩波書店、2002 年。
『修道院文化史事典』R. ディンツェルバッハー、J. L. ホッグ編、朝倉文市監訳、八坂書房、2008 年。
『新カトリック大辞典』I- IV、研究社、1996-2009 年。
大貫隆『新約聖書ギリシア語入門』、岩波書店、2004 年。
木村彰一『古代教会スラブ語入門《新装版》』、白水社、2009 年。
高津春繁『ギリシア語文法』、岩波書店、2013[14] （1960[1]）年。
田中美知太郎、松平千秋『ギリシア語入門』、岩波書店、2006[49]（1951[1]）年。

＜主要二次文献＞

・欧語文献

AGOSTINO, E. D', Barlaam di Seminara Vescovo di Gerace (1342-1348), dans A. FRYGOS (éd.), *Barlaam Calabro : l'uomo, il pensiero*, Roma, 2001.

ALFEYEV, H., *St. Symeon the New Theologian and Orthodox Tradition*, Oxford, 2000.

ALFEYEV, H., *The Mystery of Faith*, Darton, 2002.

AVVAKUMOV, Y. P., Sacramental Ritual in middle and later Byzantine Theology: ninth-fifteenth centuries, dans H. BOERSMA and M. LEVERING (ed.), *The Oxford Handbook of Sacramental Theology*, Oxford, 2015.

BALTHASAR, H. U. von, Metaphysik und Mystik des Evagrios Pontikos, Zeitschrift des deutschen morgenländischen Gesellschaft 14 (1939).

BECK, H.-G., 'Humanismus und Palamismus', in *Actes du XIIe Congrès International des Etudes Byzantines*, I, Belgrade, 1963.

BECK, H.-G., *Das Byzantinische Jahrtausend*, München, 1978（『ビザンツ世界論―ビザンツの千年―』戸田聡訳、知泉書館、2014 年、p. 308）.

BINGGELI, A., « Les stylites et l'eucharistie », dans N. BÉRIOU, B. CASEAU, D. RIGAUX, *Pratiques de l'eucharistie dans les Églises d'Orient et d'Occident* I, Paris 2009.

BOERSMA, H., and M. LEVERING (ed.), *The Oxford Handbook of Sacramental Theology*, Oxford, 2015.

BRÉHIER, L., *Le monde byzantine : Vie et mort de Byzance*, Paris, 1946.

BUNGE, G., Nach dem Intellect Leben. Zum sog. 'Intellektualismus' der evagrianischen Spiritualität, in W. NYSSEN (ed.), *Simandron: Der Wachkolpfer (Gedenkschrift für K. Gamber <1919-1989>)*, Köln, 1989.

CASIDY, A., *The Orthodox Christian World*, London, 2012

CARVANOS, C., *St.Cosmas Aitolos*. Vol. I in *Modern Orthodox Saints*, Belmont, 1971.

CARVANOS, C., *St. Nicodemos the Hagiorite*. Vol.III in *Modern Orthodox Saints*, Belmont, 1974.

CARVANOS, C., *St. Macarios of Corinth*. Vol.II in *Modern Orthodox Saints*, Belmont, 1975,

CASEL, O., *Das Christliche Kult Mysterium*, Regensburg, 1960（『秘儀と秘義 古代の儀

礼とキリスト教の典礼』、小柳義夫訳、みすず書房、1975 年）.

CERTEAU, M. De, *La Fable Mystique*, Gallimard, 1982.

CLÉMENT, O., *L'église orthodoxe*, 1965（『東方正教会』、冷牟田修二、白石治朗訳、白水社、1977 年）.

CLÉMENT, O., et J. TOURAILLE, *Philocalie des pères neptiques : composée à partir des écrits des saints Pères qui portaient Dieu, et dans laquelle, par une sagesse de vie faite d'ascèse et de contemplation, l'intelligence est purifiée, illuminée, et atteint la perfection*, Paris, 1995.

CLOGG, R., A concise history of Greece, Cambridge, 2013（『ギリシャの歴史』高久暁訳、創土社、2004 年）.

COFFEY, D., « The Palamite Doctrine of God: A New Perspective », *St. Vladimir's Theological Quarterly* 32/4 (1988).

CONGOURDEAU, M-H., « L'Eucharistie à Byzance du XIe au XVe siècle », dans *EUCHARISTIA Encyclopédie de l'Eucharistie*, Paris, 2002.

CONSTANTINIDES, C.N., *Higher Education in Byzantium in the Thirteenth and Early Fourteenth Centuries (1204-ca.1310)*, Nicosia, 1982.

CONTICELLO, C.G., et CONTICELLO(-KONTOUMA), V., *La théologie byzantine et sa tradition*, Turnhout, 2002.

CORBIN, A., J.-J. COURTINE, G. VIGARELLO, *Histoire du Corps*, tom. 1, De la Renaissance aux Lumières, Seuil, 2005（『身体の歴史 I　16-18 世紀　ルネサンスから啓蒙時代まで』、鷲見洋一監訳、藤原書房、2010 年）.

CROCKETT, W. R., Eucharist Symbol of Transformation, New York, 1989（『ユーカリスト―新たな創造』、竹内謙太郎監修、後藤務訳、聖公会出版、2014 年）.

DALMAIS, I. H., *Les Liturgies d'Orient*, Paris, 1960（『秘義と象徴―東方典礼への招き―』、市瀬英昭訳、新世社、2002 年）.

ELIADE, M., *Techniques du Yoga*, Paris, 1948.

ELIADE, M., *Yoga. Immortality and Freedom*, Princeton, 1973.

FAIVRE, A., *Les laïcs aux arigines de l'Église*, le Centurion, 1984.

FLUSIN, B., La civilisation byzantine, 2006（『ビザンツ文明』、大月康弘訳、白水社、2009 年）.

FYRIGOS, A., ed., *Barlaam Calabro : Opere contro I Latini, 2 vols.*, Vatican City, 1998.

FYRIGOS, A., ed., *Barlaam Calabro: l'uomo, l'opera, il pensiero*, Roma, 2001.

FYRIGOS, A., *Dalla controversia palamitica alla polemica esicastica (con un'edizione critica delle Epistole greche di Barlaam)*, Roma, 2005.

GARDET, L., Un problème de mystique comparrée : la mention du Nom divin-dhikr-dans la mystique musulmane, *Revue Thomiste* (1952), III et (1953), I.

GETCHA, J., « Recevoir la Communion en cellule : Un témoignage du 14e siècle », dans

A. LOSSKY et M. SODI, *Rites de Communion : Conférences Saint-Serge LVe Semaine d'Études Liturgiques (Paris 23-26 juin 2008)*, Cité du Vatican 2010.

GILLET, I. (Un moine de l'Église d'Orient), *La prière de Jésus*, 1951, 1974 avec plusieurs rééditions corrigées et augumentées dans la collection <Livre de vie> aux Éd. du Seuil, Paris (東方教会無名の修道者『イエスのみ名の祈り――その歴史と実践――』古谷功訳、あかし書房、1983 年).

GAUTIER, P., Le Typikon de la Théotokos Évergtis, dans *Revue des études byzantines*, vol.40, 1982.

HAUSHERR, I., *La méthode d'oraison hésychaste*, Rome, 1927.

HAUSHERR, I., « Comment priaient les Pères », *Revue d'Ascétique et de Mystique* 32 (1956).

HAUSHERR, I., *Les leçons d'un contemplation. Le traité de l'oraison d' Évagre le Pontique*, Paris, 1960.

HAUSHERR, I., *Noms du Christ et voies d'Oraison*, Roma 1960.

HAUSHERR, I., *L' hésychasme et Prière*, Rome, 1966.

von IVÁNKA, E., « Byzantinische Yogis ? », *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 102 (1952).

JORDAN, R., Evergetis: Typikon of Timothy for the Monastery of the Mother of God Evergetis, dans *Byzantine Monastic Foundation Documents: A Complete Translation of the Surviving Founders' Typika and Testaments*, Washington DC, 2000.

JUGIE, M., « Un théologien grec du XVIe siècle : Gabriel Sévère et les divergences entre les deux Églises », dans *Echos d'Orient* 16 (1913).

JUGIE, M., « Les origines de la méthode d'oraison des Hésychastes », *Echos d'Orient* 30 (1931).

KALDELLIS, A., *Hellenism in Byzantium : The Transformation of Greek Identity and the Reception of the Classical Tradition*, Cambridge, 2007.

(-KONTOUMA) CONTICELLO, V., « La *Philocalie* et ses versions » (en collaboration avec E. Citterio), dans C.G CONTICELLO et V. CONTICELLO, *La théologie byzantine et sa tradition*, Turnhout, 2002.

KONTOUMA-CONTICELLO , V., « De la communion fréquente : le dossier grec (1772-1887) », dans A. LOSSKY et M. SODI, *Rites de Communion : Conférences Saint-Serge LVe Semaine d'Études Liturgiques (Paris 23-26 juin 2008)*, Cité du Vatican 2010.

KONTOUMA-CONTICELLO, V., « The *Philokalia* », dans A. CASIDY *The Orthodox Christian World*, London, 2012.

LE GOFF, J., *L'Homme médiéval*, Seuil, 1989（『中世の人間―ヨーロッパ人の精神構造と創造力』、鎌田博夫訳、法政大学出版局、1999 年）.

LE GOFF, J. et N. TRUONG, *Une histoire du corps au moyen âge*, Liana Levi, 2003（『中世の身体』、池田健二、菅沼潤訳、藤原書房、2006 年）.

LEONE, P.M.L., *Niceforo Gregora: Fiorenzo o intorno alla sapienza*, Naples, 1975.

LEROY, J., *Études sur le monachisme byzantin (Spiritualité orientale, n. 85)*, Abbaye de Bellefontaine, 2007.

LOSSKY, V., *Théologie mystique de l'Église d'Orient*, Paris 1944 (『キリスト教東方の神秘思想』宮本久雄訳、勁草書房、1986 年).

LOSSKY, V., « La théologie de la lumière chez Saint Grégoire de Thessalonique », *Dieu Vivant* Cahier 1 (1945).

LOSSKY, V., *À l'image et à la ressemblance de Dieu*, Paris 1967.

LOUTH, A., *The Origins of the Christian Mystical Tradition*, Oxford, 1981（『キリスト教神秘思想の源流』水落健治訳、教文館、1988 年）.

MANTZARIDIS, G. I., « La doctrine de saint Grégoire Palamas sur la déification de l'être humain », dans M.-J MONSAINGEON et J. PARAMELLE (trad.), Saint Grégoire Palamas *De la déification de l'être humain*, Lausanne 1990.

MEYENDORFF, J., « Humanisme nominaliste et mystique chrétienne à Byzance au XIV siècle », *Nouvelle Revue Théologique* 79 (1957).

MEYENDORFF, J., *St Grégoire Palamas et la mystique orthodoxe,* Paris, 1959 (*St Gregory Palamas and orthodox spirituality,* translation by A. FISKE, New York, 1974; 『聖グレゴリオス・パラマス――東方キリスト教の神秘生活――』岳野慶作訳、中央出版社、1986 年).

MEYENDORFF, J., *Introduction à Grégoire Palamas* (Patristica Sorbonensia 3), Paris, 1959.

MEYENDORFF, J., « Le dogme eucharistique dans les controverses théologiques de XIVe siècle », *Tome panégyrique pour le six centième anniversaire de la mort de saint Grégoire Palamas*, Thessalonique 1960.

MEYENDORFF, J., 'Comment on Beck' 'Humanismus und Palamismus", in *Actes du XIIe Congrès International des Etudes Byzantines*, I, Belgrade, 1963.

MEYENDORFF, J., *Byzantine Theology. Historical Trends & Doctrinal Themes*, New York, 1974（『ビザンティン神学 歴史的傾向と教理的主題』鈴木浩訳、新疆出版社、2009 年）.

MONSAINGEON M.-J., et J. PARAMELLE (trad.), Saint Grégoire Palamas *De la déification de l'être humain*, Lausanne 1990.

MORRIS, J. W. Archpriest, The Historic Church, An Orthodox View of Christian History, Author House, 2011.

NOËL, W., Hesychasmus und Yoga, *Byzantinische Zeitschrift* 47 (1954), p. 95-103.

OSTROGORSKY, G., *Geschichte des Byzantinischen Staates*, München, 1980 (『ビザンツ帝国史』和田廣訳、恒文社、2001 年).

PAGE, G., *Being Byzantine : Greek Identity before the Ottomans*, Cambridge, 2008.

PATAPIOS, Hieromonk., and Archbishop CRYSOSTOMOS, *Manna from Athos : The Issue of Frequent Communion on the Holy Mountain in the Late Eighteenth and Early Nineteenth Centuries*, Bern 2006.

PHILIPPIDIS-BRAAT, A., « La capitivité de Palamas chez les Turcs : Dossier et commentaire », *Travaux et Mémoire* 7, 1979.

PODSKALSKY, G., *Griechische Theologie in der Zeit des Türkenherrschaft* 1453-1821, Munich, 1988.

PRETOT, P., « La communion en dehors de la messe dans le rite romain : Réflexion théologique sur des pratiques de communion eucharistique », dans A. LOSSKY et M. SODI, *Rites de Communion : Conférences Saint-Serge LVe Semaine d'Études Liturgiques (Paris 23-26 juin 2008)*, Cité du Vatican 2010.

RIGO, A., « La canonizzazione di Gregorio Palama (1368) ed alcune altre questioni », *Rivista di studi bizantini e slavi* 30 (1993).

RIGO, A., « Nicodemo Aghiorita e la sua edizione delle opere de Gregorio Palamas », dans A. Mainardi, *Paisij, lo starec*, Bose, 1997.

RIGO, A., « Nicodemo l'Aghiorita, la 'Filocalia' e Gregorio Palamas », dans O. CLÉMENT, K. KARAISARIDIS, A. RIGO, A-E. TACHIAOS, et AA.VV, *Nicodemo l'Aghiorita e la Filocalia: atti dell'VIII Convegno ecumenico internazionale di spiritualita ortodossa, sessione bizantina, Bose, 16-19 settembre 2000*, Magnano, 2001.

RUSSELL, N., *The Doctrine of Deification in the Greek Patristic Tradition*, Oxford, 2004.

SAHAS, D.J., 'Capitivity and dialogue : Gregory Palamas (1296-1360) and the Muslims', *The Greek Orthodox Theological Review* 25, 1981.

SCHMEMANN, A., *For the life of the world : sacraments and orthodoxy*, St. Vladimir's Seminary Press, 1973 （『世のいのちのために：正教会のサクラメントと信仰』松島雄一訳、新教出版、2003 年）.

SCHMEMANN, A., *The Eucharist : sacrament of the Kingdom*, St Vladimir's Seminary Press, 1988（『ユーカリスト：神の国のサクラメント』松島雄一訳、新教出版、2008 年）.

SERR, J., *La Prière du coeur*, Abbaye de Bellefontaine, 1971(?)（『イエスの祈り』、高橋正行訳、あかし書房、1978 年）.

SERR, J. et O. CLÉMENT, *La prière du cœur*, Abbaye de Bellefontine, 1985 (『イエスの祈り』宮本久雄、大森正樹訳、新世社、1995 年).

SCHMIT, J.-C., Le corps des images, Gallimard, 2002（『中世の聖なるイメージと身体』、小池寿子訳、刀水書房、2015 年）.

SINKEWICZ, R. E., 'A New Interpretation for the First Episode in the Controversy between Barlaam the Calabrian and Gregory Palamas', *Journal of Theological Studies*, 31, 1980.

SINKEWICZ, R., 'The Doctrine of the Knowledge of God in the Early Writings of Barlaam

the Calabrian', *Medieval Studies*, 44, 1982.

SINKEWICZ, R., 'Christian Theology and the Renewal of Philosophical and Scientific Studies in the Early Fourteenth Century: The *Capita 150* of Gregory Palamas', *Medieval Studies*, 48, 1986.

SINKEWICZ, R., *Theoleptos of Philadelphia, The Monastic Discourses* (Pontifical Institute of Mediaeval Studies, Studies and Texts 111), Tronto, 1992.

SINKEWICZ, R., 'Gregory Palamas' in C. G. Conticello and V. Conticello, eds., *La théologie byzantine et sa tradition*, vol. II, Turnhout, 2002.

SPITERIS, Y. et C.G. Conticello, « Nicola Cabasilas Chamaetos », dans C. G. Conticello et V. Conticello, *La théologie byzantine et sa tradition*, Turnhout, 2002, II.

STĂNILOAE, D., Viața şi învățătura Sf. Grigorie Palama, Sibiu, 1938.

STIERNON, D., « Bulletin sur le Palamisme », *Revue des études byzantines*, xxx (1972).

TAFT, R., « The Liturgy of the Great Church: An Initial Synthesis of Structure and Interpretation on the Eve of Iconoclasm », *Dumbarton Oakes Papers*, 34 et 35, 1980-81.

TAFT, R., « The frequency of the eucharist in byzantine usage : history and practice », *Studi sull'Oriente Cristiano* 4, 1, Rome, 2000.

TAFT, R., « The Byzantine Imperial Communion Ritual », dans P. ARMSTRONG, *Ritual and Art-Byzantines Essays for Christopher Walter*, Londre 2006.

TAFT, R., « Cathedral vs. Monastic Liturgy in the Christian East : Vindicating a Distinction », *Bollettino della Badia greca di Grottaferrata*, 2, 2005.

THOMAS, J., and A.C. HERO (ed), *Byzantine monastic foundation documents : a complete translation of the surviving founders' typika and testaments*, Washington, D.C., 2001.

WARE, (K.) T., *The Orthodox Church*, Pelican books, 1963.

WARE, K. (T.), The Hesychast Renaissance, in C. JONES, G. WAINWRIGHT (ed.), *The Study of Spirituality*, London, 1986.

WARE, K. (T.), The Meaning of the Divine Liturgy for the Byzantine worshipper, dans *Church and People in Byzantium*, éd. R. MORRIS, Birmingham, 1990.

WARE, K. (T.), « Praying with the Body. The Hesychast Method and Non-Christian Parallels », *Sobornost* 14/2 (1992).

YANARAS, C.H., « The distinction between essence and energies and its importance for theology », *St. Vladmir's Theological Quarterly* 19/4 (1975).

ZIGMUND-CERBU, A. Lumières nouvelles sur le yoga et l'hésychasme, *Contactes* 26 (1974).

・邦語文献

秋山聰『聖遺物崇敬の心性史』、講談社選書メチエ、2009 年。

秋山学『教父と古典解釈　予型論の射程』、創文社、2001 年。

有賀鐵太郎著作集 4『キリスト教思想における存在論の問題』、創文社、1981 年。
井上浩一、栗生沢猛夫『世界の歴史 11　ビザンツとスラヴ』、中央出版社、1998 年。
大月康弘『帝国と慈善　ビザンツ』、創文社、2005 年。
大森正樹「ビザンツの修道制」、『中世の修道制』、創文社、1991 年。
大森正樹「祈りの系譜(1)-(10)―ヘシカズム研究」、「祈りの方法論」、「新神学者シュメオンとその神秘体験」、「否定神学と人間の神化」、いずれも『エイコーン』第 10-31 号（1993 年秋-2005 年春）。
大森正樹『エネルゲイアと光の神学―グレゴリオス・パラマス研究―』、創文社、2000 年。
大森正樹『東方憧憬―キリスト教東方の精神を求めて―』、新世社、2000 年。
大森正樹「『ヌース』考」、『アカデミア』人文社会科学編 90 号（2010 年）。
大森正樹「ヘシカズム論争とは何であったのか―バルラアム『第 1 書簡（1～29）を通して―』」、『エイコーン』第 44 号（2013 年）。
岡田温司『キリストの身体 血と肉と愛の傷』、中公新書、2009 年。
荻野弘之編著『神秘の前に立つ人間―キリスト教東方の霊性を拓く―』、新世社、2005 年。
荻野弘之編著『続・神秘の前に立つ人間―キリスト教東方の霊性を拓く II―』、新世社、2010 年。
落合仁司『地中海の無限者 東西キリスト教の神-人間論』、勁草書房、1995 年。
落合仁司『＜神＞の証明―なぜ宗教は成り立つか』、講談社現代新書、1998 年。
坂口ふみ『＜個＞の誕生 キリスト教教理をつくった人びと』、岩波書店、1996 年。
塩川徹也『虹と秘蹟 パスカル＜見えないもの＞の認識』、岩波書店、1993 年。
上智大学中世思想研究所編『中世の人間像』、創文社、1987 年。
上智大学中世思想研究所編『中世の修道制』、創文社、1991 年。
上智大学中世思想研究所編訳監修『中世思想原典集成 1 初期ギリシア教父』、平凡社、1995 年。
上智大学中世思想研究所編訳監修『中世思想原典集成 2 盛期ギリシア教父』、平凡社、1992 年。
上智大学中世思想研究所編訳監修『中世思想原典集成 3 後期ギリシア教父、ビンティン思想』、平凡社、1994 年。
鈴木順『古代末期禁欲論とエヴァグリオス』、リトン、2009 年。
高橋英海「エヴァグリオスにおける祈りについて―『祈りについての一五三の断章』を中心に」、『エイコーン』42 号（2012 年）。
高橋保行『ギリシャ正教』、講談社現代文庫、1980 年。
高橋保行『神と悪魔 ギリシャ正教の人間観』、角川選書、1994 年。
高橋保行『知られていなかったキリスト教 正教の歴史と信仰』、教文館、1998 年。
谷寿美「非分離の精神―近代ロシアの宗教的予感―」『非・西欧の視座』（末木文美士、中島隆博編）所収、大明堂、2001 年。

谷寿美『ソロヴィヨフ 生の変容を求めて』、慶應義塾大学出版会、2015 年。
谷隆一郎『東方教父における超越と自己―ニュッサのグレゴリオスを中心として―』、創文社、2000 年。
谷隆一郎、岩倉さやか訳『砂漠の師父の言葉』、知泉書館、2004 年。
谷隆一郎『人間と宇宙的神化 証聖者マクシモスにおける自然・本性のダイナミズムをめぐって』、知泉書館、2009 年。
谷隆一郎『アウグスティヌスと東方教父―キリスト教思想の源流に学ぶ―』、九州大学出版会、2011 年。
谷隆一郎「エネルゲイア・プネウマの現存―東方・ギリシア教父におけるエヒイェロギアの展開―」、『共生学』第 7 号（2013 年）。
谷隆一郎『キリスト者の生のかたち―東方教父の古典に学ぶ―』、知泉書館、2014 年。
谷隆一郎訳『証聖者マクシモス 『難問集』』、知泉書館、2015 年。
土橋茂樹「偽マカリオスにおける魂浄化の三段階」、『中世思想研究』第 37 号（1995 年）。
土橋茂樹「擬マカリオスにおける霊的感覚」、『エイコーン』第 23 号（2001 年）。
土橋茂樹「擬マカリオスにおける祈りの意義」、『中央大学人文研紀要』第 52 号（2004 年）。
土橋茂樹編著『『フィロカリア』論考集　善美なる神への愛の諸相』、教友社、2016 年。
高井寿雄『ギリシア正教入門』、教文館、1977 年。
鶴岡賀雄『十字架のヨハネ研究』、創文社、2000 年。
鶴岡賀雄「西欧キリスト教史における「行と身体」の諸相」、『宗教研究』第 81 巻、355 号、第 4 輯、第六十六回学術大会紀要特集号所収、日本宗教学会、2008 年。
橋川裕之「学びの果て　ビザンティン哲学者の自伝と自負」、森原隆編『ヨーロッパ・エリート支配と政治文化』成文堂、2010 年。
橋川裕之「アトス山の静寂――総主教アタナシオスとビザンティン・ヘシカズムの接点」、藤巻和宏編『聖地と聖人の東西――起源はいかに語られるか』勉誠出版、2011 年。
橋川裕之「初期オスマン社会に生きるギリシャ人――グリゴリオス・パラマスの囚われの旅と証言」、森原隆編『ヨーロッパ・「共生」の政治文化史』成文堂、2013 年。
坂東性純「イエスの祈りと念仏」、『比較思想研究』3、1976 年。
久松英二「「イエスの祈り」の起源について」、「「イエスの祈り」の発展史」、いずれも『エイコーン』第 14、16 号（1995 年冬、1996 年冬）。
久松英二「初代キリスト教霊性史（六）修道的神秘思想の始まり―ポントスのエヴァグリオスおよび擬マカリオス―」『エイコーン』23 号（2001 年春）。
久松英二『祈りの心身技法 十四世紀ビザンツのアトス静寂主義』、京都大学学術出版会、2009 年。
久松英二『ギリシア正教　東方の智』、講談社選書メチエ、2012 年。
古谷功「東方キリスト教修道制の起源と展開」、『中世の修道制』、創文社、1991 年。
宮本久雄『教父と愛智―ロゴス（言）をめぐって―』、新世社、1989 年（改定増強版第一刷 1990 年）。

宮本久雄『聖書と愛智―ケノーシス（無化）をめぐって―』、新世社、1991 年。
宮本久雄『宗教言語の可能性―愛智の一風景・中世』、勁草書房、1992 年。
宮本久雄『「関わる」ということ―聖書の眼差し―』、新世社、1997 年。
宮本久雄、大貫隆、山本巍『聖書の言語を超えて―ソクラテス・イエス・グノーシス』、東京大学出版会、1997 年。
宮本久雄『福音書の言語宇宙―他者・イエス・全体主義』、岩波書店、1999 年。
宮本久雄『存在の季節』、知泉書館、2002 年。
宮本久雄『愛の言語の誕生―ニュッサのグレゴリオスの『雅歌講話』を手がかりに―』、新世社、2004 年。
宮本久雄『いのちの記憶―受難と甦りの証言―』、新世社、2007 年。
宮本久雄『他者の甦り―アウシュヴィッツからのエクソダス』創文社、2008 年。
宮本久雄『身体を張って生きた愚かしいパウロ 身体（ソーマ）と他者』、新世社、2009 年。
宮本久雄『ヘブライ的脱在論―アウシュヴィッツから他者との共生へ』、東京大学出版会、2011 年。
宮本久雄『旅人の脱在論―自・他相生の思想と物語りの展開』、創文社、2011 年。
宮本久雄『他者の風来―ルーアッハ・プネウマ・気をめぐる思索』、日本キリスト教団出版局、2012 年。
宮本久雄「根源悪からのエクソダス（脱在）」、『共生学』第 7 号（2013 年）。
宮本久雄『出会いの他者性―プロメテウスの火（暴力）から愛智の炎へ』、知泉書館、2014 年。
宮本久雄編著『ハヤトロギアとエヒイェロギア 「アウシュヴィッツ」「FUKUSHIMA」以降の思想の可能性』、教友社、2015 年。
森安達也『キリスト教史 III』、山川出版社、1978 年。
森安達也『ビザンツとロシア・東欧』、講談社、1985 年。
森安達也『東方キリスト教の世界』、山川出版社、1991 年。
山本芳久「「出エジプト記の脱在論」としてのエヒイェロギア」、『共生学』第 7 号（2013 年）。
米田治泰, 森安達也『永遠のイコン ： ギリシア正教』、淡交社、1969 年。
和田廣『資料が語るビザンツ世界』、山川出版社、2006 年。

論文の内容の要旨

論文題目：　グレゴリオス・パラマスの身体観―東方キリスト教的人間観の研究―
　　氏名：　袴田　玲

本研究は、14 世紀のビザンツ帝国に生きた東方キリスト教を代表する修道士、神学者にして後のテサロニケ大主教、グレゴリオス・パラマス（c.1296-1359、以下パラマスと表記）の思想における身体観（すなわち、人間の身体とイエス・キリストの身体に関する思索）を考察することにより、「東方キリスト教的」人間観を解明することを企図している。

本研究が対象とするのは、キリスト教の中でも、東ローマ帝国からビザンツ帝国を通じ、ギリシャやシリア、またロシアをはじめとするスラヴ諸国で今日まで豊かに息づく東方キリスト教（とりわけ東方正教会）におけるヘシュカスム ήσυχασμός の伝統である。ヘシュカスムとは、東方キリスト教の修道制において発展した祈りと観想の方法、およびその思想を意味する。修行者は孤独と静寂（ヘーシュキア） ήσυχία のなかで＜イエスの祈り＞と呼ばれる短い祈りを絶えず唱え、それを通じて魂を浄化し、神と一つになること（神化（テオーシス） θέωσις）をめざす。その源流は原始キリスト教時代に砂漠で修行した師父たちにまで遡るが、ビザンツ帝国時代末期には、この祈りに座法や呼吸法といった身体技法を採り入れた実践がアトス山（現ギリシャ共和国北東部、ユネスコ世界遺産）で盛んになった。狭義には、当時このような修行を実践していた修道士のことをヘシュカストと呼ぶ。彼らは修行を極めたさきに神と一つになり、またその際に神を光として見る恩恵に浴すると主張した。彼らの実践と主張のキリスト教的正統性をめぐり、帝国を二分する事態にまで発展したヘシュカスム論争（1337-51）において、ヘシュカストを擁護するために聖書と師父の東方キリスト教的伝統に根ざしてヘシュカスムを解釈し、思想的に支えたのがパラマスだったのである。

そもそも、キリスト教にあっては、神の受肉、イエス・キリストの身体における死と復活、聖体拝領など、身体的主題が強く表れる反面、身体は人間の欲望や罪と結び付けられ、否定的に捉えられることも多い。また、ヨーガや座禅のように、その実践の中で身体を積極的に活用する他の宗教と比較すると、キリスト教の実践における身体の活用は消極的で、むしろ意識を身体的活動から遠ざける方向の努力が奨励されることもある。そのような点からすると、ヘシュカスムはキリスト教において「異質」な事例である。しかし、それゆえにこそ、この「異質」な実践や思想をそれまでのキリスト教の伝統に組み入れるべく論陣を張ったパラマスの思想においては、人間（およびイエス・キリスト）の身体そのもの、身体と魂の関係、霊的完成への道行きにおける身体の役割等々、身体やそれを通じた人間存在そのものについての根本的な反省が加えられ、それらについての東方キリスト教的理解が提示されている。このような見解に基づき、本研究はパラマスの著作原典の精緻な読解をその中心に据えた。

先行研究の問題点との関連で本研究の内容を示すならば、以下のようにまとめられる。

まず、これまでのパラマス研究では、ヘシュカスム論争の中で彼が提示した「神の本質(ウーシア) οὐσία と働き(エネルゲイア) ἐνέργεια の区別」に関する神学上の問題に議論が集中し、そもそも論争の発端となったヘシュカストの祈りの方法やその中での身体の在り方に関するパラマスの思索に十分な光が当てられて来なかった。また、ヘシュカスムというより広い視野に立ったこれまでの研究においても、インドのヨーガやイスラームのスーフィズム、仏教の称名や座禅など他宗教における修行法との表面的類似を指摘するにとどまるものが多く、東方キリスト教修道制の成立から 14 世紀に至るまで、その内部でヘシュカスムの祈りの方法が確立されていくさまを具に追った成立史研究こそあれ、ヘシュカストの祈りの方法がいかにして東方キリスト教的に解釈され、意味づけられ、根拠づけられていったのかという点は明確に示されてはこなかった。そこで本研究は、パラマスの主著『聖なるヘシュカストのための弁護 *Λόγοι ὑπὲρ τῶν ἱερῶς ἡσυκαζόντων*』からヘシュカストの祈りの方法についてのパラマスの釈義を取り上げ、その基となる彼の身体観と併せて考察を加えた（本論第一部）。それにより、パラマスが新旧約聖書や東方キリスト教世界の先人たち（とくに偽ディオニュシオス・アレオパギテース）のテクストに依拠しながらヘシュカストの祈りの技法を思想的に支えていることを明らかにした。その中で、霊的完成のためには知性(ヌース) νοῦς を身体から引き離さねばならないと主張する論敵に対し、パラマスが身体はそれ自体として悪ではなく、魂の浄化を妨げるのはむしろ「身体の内に住まう悪しき想念」であるとして、神の創造した人間身体の根本的善性を擁護していること、また、霊的なものと物質的なもの、魂と身体といったものが区別はされても分離はされず、むしろ両者のあいだには或るつながりが存在し、そのつながりこそが魂の浄化に励む修行において身体技法を有効ならしめるものであると考えていることを示した。

ここで重要なのは、孤独と静寂を旨とするヘシュカストの修行にとっても、典礼、とりわけキリストの身体に与る秘跡である聖体拝領(エウカリスティア)への定期的な参与が不可欠であるとパラマスが考えている点である。これまでの研究の中で、ヘシュカストの修行形態は共同体を前提とする典礼(教会)生活とは相容れないものとされ、ヘシュカストには共同体の枠組みからはみ出る逸脱者ないし宗教的エリートというイメージが付きまとっていた。しかし、本研究では、パラマスにおける聖体拝領の実践を、その著書『キリストによって定められた十戒、あるいは新約聖書の法 *Δεκάλογος τῆς κατὰ Χριστὸν νομοθεσίας, ἤτοι τῆς νέας διαθήκης*』や弟子であったフィロテオス・コッキノス（1379 年没)による『パラマスの生涯 *Λόγος ἐγκωμιαστικὸς*』から読み解き、パラマスがアトスやその他の隠遁所で孤独な修行生活を送っていた時期にあっても、土日には修道院の共同体へ戻って聖体拝領に与っており、むしろ極端な隠遁生活によって典礼をないがしろにするヘシュカストを非難していたことを明らかにした（本論間奏部）。ビザンツ帝国内の修道院における数々の『修道院規則(テュピコン)』から推し量るに、当時の修道士たちは奉神礼に参加しても聖体に与る頻度が低く、多くは年に数回程度であった。この点に鑑みると、パラマスの聖体拝領への執着はむ

しろ当時の一般的な修道士よりも強いとすら言える。

典礼(とくに聖体拝領)を人間の完徳の道行きにおける必要不可欠な要素として重視する姿勢は、パラマスがテサロニケ大主教として過ごした晩年にその多くが著された『講話集 *Ὁμιλίαι*』において一層色濃く見受けられる。その修道士や神学者としての側面に議論が集中し、パラマスの司牧者としての側面を看過しがちであったこれまでの研究に対し、本研究では、アトスを離れ、ヘシュカスム論争を経たパラマスが大主教として街の一般信徒に接する中で形成していった人間理解（およびそれ以前のものとの差異）に着目し、『講話集』の分析を行った（本論第二部)。『講話集』の分析から明らかになった彼の聖体拝領論には、聖体拝領によって使徒とキリストの関係を超える親密かつ直接的な合一が信徒個人とキリストの間に確立され、また信徒同士がキリストのからだにおいて一つとなり、共同体的交わり実現させるとの見解が認められた。さらに、『聖なるヘシュカストのための弁護』においては合一の具体的体験（光や熱や甘さといった感覚的な要素を含む）に重点が置かれていた神化（神とに人間の合一）が、『講話集』の中ではとりわけ聖体拝領において実現するものとして語り直され、その神秘的要素を残しつつも、救済概念に重ねられてゆくことも確認された。パラマスにとって、神の法を守り、絶えざる祈りを通じて自らの犯した罪を悔い、魂を浄化することがいわば「修道的生」なのであり、それは孤独の中に生きる修道士のみならず、すべての信徒に推奨されている。つまり、パラマスの思想において修道生活（修道的生）と教会生活は二つの対立する生活様式ではなく、双方相俟って人間の救いへと通じる生き方とされており、それぞれの中で実現される神との個人的・垂直的関係性と共同体的・水平的関係性はまさに聖体拝領において交差する。人里離れたアトス山で孤独の内に修行するヘシュカストから、司牧者としてテサロニケの街の一般信徒の救いに心を配るようになったパラマスの人生の転換点は、まさにヘシュカスムの歴史の転換点でもあり、ヘシュカスムが近現代世界においてその裾野を一般信徒にまで広げる要因となったといえよう。

要するにパラマスは、13-14 世紀に隆盛した特殊な修行形態とその主張によって極端に限定される傾向にあったヘシュカスムを――そしてその主軸をなす神化概念を――、その「身体の哲学」によって再び人々の前に披いたのだと本研究は結論した。証聖者マクシモスやそれ以前の教父たちが描いてきたような宇宙論的拡がりをもつ神化概念を取り戻し、そこに一般信徒をも改めて参与させることで、ヘシュカスムの伝統が現在にまで息づくことを可能としたこと、言い換えるならば、ヘシュカスムと神化概念それ自体を普遍化ないし民衆化（vulgarisation）したこと、ここにパラマスの思想的意義を本研究は見出す。18 世紀末に出版された東方キリスト教の師父たちの詞華集『フィロカリア *Φιλοκαλία*』編纂の意図が、司祭や修道士だけでなく巷間に生きる一般信徒も絶えず祈りにとどまり、各人が自らの救い＝神化を見据えて浄化のわざに励むことを訴えることにあり、その意味で修道院世界と俗世界の境界線を乗り越えることであったとするならば、彼ら編纂者たちの精神の萌芽はすでにパラマスの身体を通じた人間理解において認められるのである。